

## 持続可能な開発目標 (SDGs) の意味



福士謙介  
 東京大学国際高等研究所サステイナビリティ学連携研究機構  
 教授  
 国際連合大学サステイナビリティ高等研究所 客員教授

2015年に持続可能な開発目標 (SDGs) が発表され、多くの国がその目標年である 2030 年までに SDGs 達成を積極的に推進することに同意した。SDGs の詳しい説明は他書に譲るが、最も重要と思われることは途上国と先進国が共通の目標に共に取り組むことである。これが途上国の課題がメインであったミレニアム開発目標 (MDGs) と大きく異なる点である。その理由としては、今まで長く続いてきた完新世 (Holocene) からパウル・クルツェンによって提唱された人新世 (Anthropocene) に入ったと思われるからである。氷河期が終わる頃から始まった完新世の間は温度がほぼ一定であり、温度や降雨もある程度人間が予測できるようになり、農業が盛んになり、その結果人間が増え知識も増えて産業革命を経て近代に至る。人新世とは人間活動による影響が地球環境に影響を与える時代のことであり、その原因は多く考えられるが、ヨハン・ロックストロームはプラネタリ・バウンダリという考えから 9 つの分野 (気候変動、生物多様性の破壊、窒素・リン、海洋酸性化、土地利用変化、水、オゾンホール、エアロゾル、化学物質汚染) における地球の許容量を計算し、発表している。この中で気候変動の最大要因である大気中の二酸化炭素濃度はすでにバウンダリ (限界値) を超えているとしている。

今まで人間活動はエネルギーや資源が制約となって実施できない場合が多かった。例えば、大規模な火力発電所をつくる場合、その燃料を確保しなければ発電することができなかった。しかし、今後私たちは地球温暖化やその他の地球の許容量という観点から火力発電所をつくる事ができないかもしれない。これは、今まで先進国を中心につくり上げてきた技術や制度、それらに基づいて構築されたインフラについては、プラネタリ・バウンダリを考えると、新しい投資や開発はできないのかもしれない。事実、前述のロックストロームは火力発電所建設に投資をすることは無意味だと言っている。私の専門の環境工学で言うと、下水を処理するために多くの国では活性汚泥法というエネルギーを大量に投入する必要があ

るプロセスを作ってきたが、それを途上国にそのまま整備することは、もしかしたら適当ではないのかもしれない、ということである。

SDGs は途上国と先進国が共通の目的に共に取り組む事を重要視している。人新世に入った今、今までの自然・社会条件とは異なる制約下で社会の開発を行うためには新しい技術や制度が必要である。また、すでに社会インフラがある程度整った先進諸国でも今使っているインフラが使えなくなる可能性もあり、ここでも新しい技術・制度の開発が必要になってくる。再生可能エネルギー、低エネルギーで稼働する下水処理場、生態系への影響が少ない社会インフラなどを途上国において先進国の協力で先ず開発し、その後それらを先進国へ導入するようなリバースイノベーションを念頭に途上国への援助を考える必要がある。すでに高い下水道普及率を誇る日本では新規に大規模な下水処理場をつくることは今後無いだろう。しかし、人口減少下の日本では現存する下水処理場の維持が難しくなっている。今後、下水処理場の更新が必要な場合、より小型で低コスト、低エネルギー、低温室効果ガス排出型の処理場をつくらなくてはならない。その技術は、例えば東南アジアで日本人技術者の協力により新しく開発されたインフラが導入される可能性がある。

SDGs は今あらゆる政府機関、国際機関、企業、大学、学術団体、NGO 等が活用を検討しているが、どのようにそれぞれの団体の本来の活動に生かしていくかの具体例はまだ明確に示されていない。社会のインフラ開発・維持を担う土木は少なくとも 100 年先を見つつ仕事をしなくてはならず、その意味では SDGs は大いに活用しつつも、その先の目標を認識しなくてはならないという難しい立場にある。気候変動におけるパリ協定の多くの国の目標年は 2050 年と 2100 年である。地球温暖化問題が 2030 年に解決される事は常識的に考えてあり得ない。その意味では SDGs は通過点に過ぎない。SDGs に関しては実に様々な取り組みが多く分野で始まっているが、それを一時期のお祭りとして終わらせることなく、2030 年以降に続くような社会の常識として定着させる事が必要である。人新世は見方を変えると、人間によって地球の未来を変える事ができるということである。私たちの行動が社会の幸せな未来にとって、大きな意味を持っているのである。人間がともに考え、協力し未来を創造していくと、そこには持続的で明るい未来が待っている。